

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：27101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652170

研究課題名(和文)口頭芸ジャンルの盛衰史 メディア文化史記述における口承文芸研究の基礎領域化

研究課題名(英文) Prosperity and Decline in the History of Oral Performances: How can the study of Oral Literature share a foundation in writing History of Media Culture?

研究代表者

真鍋 昌賢 (Masayoshi, Manabe)

北九州市立大学・文学部・教授

研究者番号：50346152

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、口承文芸研究におけるメディア文化史研究への貢献を探求することを目的としている。焦点をあてたのは「口頭芸の盛衰」である。「口頭芸」とは、専門的な演者による演目・演技を指している。「盛衰」の分析を、口頭芸とメディアの関係性を考察するための重要な研究方法として位置づけて、具体的には浄瑠璃、映画説明、漫談、浪曲、競馬実況の事例研究に取り組んだ。成果として、口頭芸研究に有効と考えられる4つの視点を得た。それらは1)系譜の複数性を念頭に置いたジャンルイメージの再構築(2)草創期と衰退期を中心とした演者の動向分析(3)ジャンル間の演目比較研究(4)「名演技」の生成経緯の分析である。

研究成果の概要(英文)：The aim of this team research is to explore the ways of how Koshō Bungei Kenkyū (Studies of Oral Literature) can contribute to the History of Media Culture, by focusing on Koto-gei (Oral performances). Defining Oral performances as representations by professional performers, we mainly analyze “prosperity and decline” of those performances, as to examine the relationship with various media. Joruri, Eiga Setsumeï, Mandan, Rokyoku and Keibajikkyo were discussed as case studies, and we reached four perspectives as follows: (1)Reconstructing the images of genre including plural genealogy, (2) Analysis of Performers'trend/behavior in the period of beginning and declining, (3) Comparative study of performing programs between different genres, (4) Analysis of the process in which “excellent performance” is to be generated.

研究分野：民俗学

キーワード：メディア パフォーマンス 口承文芸 文化史

1. 研究開始当初の背景

大衆文化研究、メディア文化研究の古典は、同時代のメディア変容・大衆文化の勃興をとらえるために、しばしば民俗学的見地・蓄積をふまえて構成されていた。鶴見俊輔の「限界芸術論」は柳田民俗学を研究の出発点としてすえ、「大衆芸術」が生活実践の延長線上に生成していることを理論的に提示した(『芸術の発展』『現代芸術』勁草書房1960年)。あるいは、加藤秀俊は、現代の放送文化をそれ以前のコミュニケーション形態の重なり合いのなかで相対化し、視聴覚文化史を記述しようとした(『見世物からテレビへ』岩波新書1965年)。しかし民俗学は、こうした「古典」を学問間交渉のなかで批判検討することを怠り、同時代・前代のメディア文化を、生活をつくる表象文化として論じることはほとんどなかった。民俗学側からは、高度経済成長は研究対象を消滅にむかわせる変動であるという認識でしかなく、間メディア的な視点から物語・芸の変容(生成/衰退)の実態についての関心はうすかった。

大衆文化・メディア文化と民俗学の交差は、さまざまに設定しうるが、物語・芸という点において注目すべきは口承文芸研究である。口承文芸研究では、「語り物」や「咄の者」などの研究領域で専門的な演者及びその演目・演技に注目が注がれてきた。しかしながら、「語り物」の衰退などの指摘にみられるように、研究者の数、テーマ・研究対象のバリエーションという点からみて、けっして活気に満ちているとはいえない。

専門的(プロフェッショナル)な演者による声の表象は、文化史研究の理論的根幹にかかわるテーマでありながら、いまだそういう意識は希薄である。ピーターバークは、文化史研究の重要かつ新しいテーマとしてパフォーマンスを挙げ、「強烈な印象」をうけた重要な作品でありながら、いまだ文化史家にほとんど語られない書物としてA・ロード『物語の語り手』を挙げている(『文化史とは何か』法政大学出版局2008、135-136頁)すなわち、専門的な語りの研究は、言語論的転回以降の「新しい文化史」(リンハント)研究の理論的な提言を可能にする可能性を潜在させている。

なお本研究は、基盤研究(C)「近代日本における語り芸研究の方法論の構築」(2008~2010)で得られた方法論の成果の一部を継承・発展するために構築されている。その一つは領域横断的なネットワークの拡張である。もう一つは、研究代表者である真鍋が譲り受けた森川司氏のレコードコレクションの公的機関への収蔵である。

2. 研究の目的

本共同研究の目的は、口頭芸研究と文化史研究の交差を探るためのテーマとして口頭芸の盛衰史を設定し、具体的な事例研究のなかでその可能性を議論・検討し提言を目指す

ことにある。「口頭芸」とは、「専門的」な芸を扱う領域をカタリ・ハナシ・ウタなどの領域にまたがる口演領域をひろく視野に入れた概念として設定されている。またそれは、声のみで成り立っているというわけではないという点に留意すべきである(視覚情報、器楽伴奏など)。

口頭芸は、一般的な人々の感性・価値観を参照し(客受けの意識)さらにそれらを確認/更新していく再生産装置である。専門的な演者の表象は、客受け、制度的な制限、演者の思惑などが重層的に重なり繰り出される複合的な独自性をもっている。また「演じられた声」は人間の成長過程のなかで無意識のうちに聞き取られ、自己表現、役割モデルの理解に援用されていく。メディアの分かち難さを前提として人間の最も身近なメディアである声はどのように流通し消費されてきたのか。またされていくのだろうか。

また、本研究では、口頭芸研究のための資料開拓についても関心の対象とした。

3. 研究の方法

本共同研究では、以上のような問題関心のもとに構想された。口頭芸の盛衰史をメディアの変遷史を軸に考える際に、速記本・活動写真・レコードの登場時期視点(世紀転換期)ラジオ、電気吹込みレコード、トーキー映画などの登場時期(1920年代後半から30年代)、民間放送、テレビ放送登場時期(1950年代後半)を指標とし、なおかつ大きく分けて新しい口頭芸の勃興と既存の口頭芸の変容(衰退を含む)という指標を重ね合わせるなかで各自が研究の方向性を定めた。

萌芽研究ということで、網羅的というよりは、先鋭的に可能性を開拓することを旨として、事例をしぼって考察を進めていった。それが、活動弁士の勃興、漫談の勃興、実況アナウンスの勃興・変容、それらを相対化するうえで浄瑠璃の変容という4つの視点であった。

資料の開拓としては、東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵の映画視聴をおこない、映画から口頭芸を考える試みをおこない、また浪曲SPレコードの活用についても検討した。

4. 研究成果

1) 各担当の概要

漫談研究(真鍋担当)

『日本民俗学』に掲載された論文において、口承文芸研究の「語り物」概念の限界を乗り越えるために、口頭芸概念を導入することを提案した。いわば、理論的研究史的に口頭芸研究を位置づけ論じたことが共同研究上の意義である。

その後、具体的な事例研究として、大辻司郎の実践史を再構成する研究に取り組んだ。漫談は、活動弁士であった大辻司郎によってはじめられたジャンルである。初期の漫談は徳川夢声と大辻によって支えられた。本研究

では、徳川に比して注目がほとんどされてこなかった大辻に焦点をあて、漫談の勃興（1920年代）漫談の定着（1930年代）について資料収集と実証的研究をおこなった。そこで見えてきたのは、「漫談」への道程が映画説明の時代からはじまっていたことである。それは「説明」からの逸脱＝笑いの探求から開かれていった。そしてそれを支えたのは大辻の「奇声」であった。「漫談」は口頭芸として出発しつつも、一九二〇年代後半以降のメディア空間を横断していくために明示された看板であり、ラジオ時代・トーキー時代を迎え、声の臨場感が再編制されていなかで塑像されたプロフェッショナルな一人芸のあり方だった。

映画説明のなかであればこそ、「漫談」の芽が勢いよくのびたと言っていえる。映像を媒介した客との関係（上映中）、映像を媒介しない客との関係（上映中断中）、演者どうしとの関係（待機中）のなかで、スクリーンからの独立は自覚されていった。いわば客との緊張関係、及び演者どうしとの緩んだ関係が交差するなかで商品化の可能性を見出されていったのである。司郎の考えた「漫談」とは、“わたし”の身体感覚がのせられた“言葉”を道具としつつ、同時代の大衆消費社会で共有される生活感覚への共振を目指す芸であった。

1930年前後には漫談は、メディア空間が再編成されるなかで声のリアリティーを再現するうえで重宝されたレットルとなっていた。漫談の盛衰を追尾するうえで次の課題は戦時下の変容過程である。

浄瑠璃研究（細田担当）

口頭芸はしばしば人形操りと結びついて、舞台芸能として上演されてきた。有名なのは義太夫節浄瑠璃を用いた人形浄瑠璃であるが、その他にも説経節などを用いた八王子車人形や浪花節を用いた西畑人形などがある。そこで本研究では、それらの舞台芸能における人形操りの演者に対するインタビュー調査の結果から、それぞれの口頭芸の特質を考察した。具体的には人形浄瑠璃文楽の吉田勘彌氏、八王子車人形の五代目西川古柳氏、西畑人形の二代目朝日若輝氏である。そのうち、八王子車人形に関するインタビューは「車人形と新車人形 八王子車人形・五代目西川古柳氏に聞く」（2013『八王子市史研究 3』）として発表した。また人形浄瑠璃に関する考察を、「人形浄瑠璃の三人遣いにおける左遣いと足遣い 文楽人形遣い・吉田勘彌氏への聞き取り調査から」（丸橋良雄ほか編『比較文化：グローバルコミュニケーション』2015 英光社）と題して発表した。

また代表的な口頭芸である浄瑠璃と浪花節とに共通する演目である『壺坂靈験記』について考察をおこなった。浪花節の『壺坂靈験記』については、成立の経緯などは従来不詳であったが、詞章について文学研究的なア

プローチをとることによって、浄瑠璃から講談、そして浪花節という流れを明らかにすることができた。その成果は、「講談と浪花節の『壺坂靈験記』」（2013『帝京大学文学部紀要日本文化学』44）として発表している。

活動弁士研究（上田担当）

活動写真弁士に関する資料調査を実施し、その成果にもとづき、第一に弁士に接続される口頭芸の系譜を、第二に興行空間としての映画館を論点として、科研研究会において口頭発表をおこなった（2012年9月、2013年12月）。活動弁士の系譜はこれまでに様々な語られ方をしてきたが、本研究では、政治演説の経験者が無声映画に関わりをもった事実注目し、初期の弁士の実態の解明に取り組んだ。また松永文庫において、九州北部における映画興行資料の実地調査をおこない、地域の興行状況に係る資料の所在を明らかにした（2013年12月、2014年8月）。

競馬実況研究（岡田担当）

実況アナウンスをテーマとして研究史研究を進めた。事例研究としては競馬実況の歴史的展開についての考察してきた。ラジオからテレビへとするなかで競馬実況がどのように社会的な位置づけを得てきたのかについて研究を進めてきた。研究会では音声研究の基礎的な理解を研究会で共有するための発表もおこなった。

2) 共同研究としてのまとめ

本共同研究は萌芽研究としておこなわれてきた。つまり、今後の共同研究のモデルケースとなる事例研究を生み出し、なおかつそこから連携のために共有できる視点を得ることが「萌芽」としての成果である。上記の研究成果をふまえて、口頭芸の比較研究に取り組む際に重要と考えられる視点（研究方法）を以下に記す。

演者論の可能性

視点1 系譜の複数性を念頭に置いたジャンルイメージの再構築

上田の研究では、映画草創期においては、近世以来の口頭芸の伝統のなかで理解されがちな活動弁士の存在が、実際には近代の新しい口頭芸との関連が深かったことが論じられている。また真鍋の研究では、漫談家が、活動弁士（映画説明者）の系譜から生まれてきた一方で、演者の人生史を長期的に眺めると、落語、浪花節、講談などの経験や素養をもっていたりすることが分かっている。事後的にジャンルの歴史が繰り返し語りなおされるなかで、それはしばしば単純化され硬直化する。しかし、演者に焦点をしばるなかで見えてくるのは、ジャンルの系譜の複数性（あるいは多様性）である。芸を批評する言葉においては、既存のジャンルが持ち出されその類比がしばしば語られる。その点におい

て、受容（視聴）の側面から見出される類比で理解をとどめるのではなく、演者の来歴・動向に注目することで系譜の複数性を描き出すことが、ジャンル史をよりダイナミックに理解することにつながると考えられる。

視点2 草創期と衰退期を中心とした演者の動向分析

上田はまた、無声映画の「最盛期」に活動弁士が持ちえた影響力について論じるなかで、彼らが芸能者の枠に収まっていたことを指摘している。また真鍋は、浪曲の停滞・衰退期とされている1950年代後半においては、歌謡曲、ポーズなどに若手が転向していく様相について研究をしている。これらのことから言えるのは、ジャンルがスターを中心として隆盛と見える状況が、見方を変えれば安定や静態として見え、衰退と見える状況が、周縁部分では流動的に活性化されている側面が発見される点である。つまり浪曲の衰退は新たなジャンルの生成という積極的な側面と表裏一体であった。盛衰をめぐる言説を、演者の動向から照射しなおすという方法は、ジャンル間の連続性/非連続性を論じなおすきっかけであると同時に、ジャンルが内包していた可能性とはどのようなものだったのかを論じなおすことにつながっていく。

演目論の可能性

視点3 ジャンル間の演目比較研究

細田の研究では、『壺坂靈験記』が浄瑠璃から講談を経て浪花節に至る過程を実証的に明らかにした。近代の語り物である浪花節には、多様なチャンネルから演目の資源が流入してきたと考えられるが、まだ詳細は明らかになっていない。細田論文のようなジャンル間をまたぐテクストの交渉については、新聞小説、新派、落語などに、あるいは映画、テレビドラマなどに視野を広げていくなかで、前近代・近代・現代を連続的な軌道としてとらえられる可能性があるだろう。

なお、こうしたジャンル間の比較研究は、演目内容だけでなく、演じ方についても検討していく必要がある。それは先に述べた「系譜の複数性」と深く連動している。

視点4 「名演技」の生成経緯の分析

演じ方を議論する際に、演技のすばらしさを所与のものとしてしまうのではなく、それが歴史的な経緯のなかで評価の前提条件がどのように整ってきたのかという点について検討を加えていく必要がある。

岡田の研究では、競馬実況がスポーツ実況のなかで占めている固有の位置づけをメディアの変遷を含めた歴史的経緯のなかで検討している。テレビ時代の「名実況」がなぜ生まれるのかについて、歴史的な位置づけと実況の構造の特徴から検討している。

「名演技」の歴史的生成というテーマは、事後的に語られる歴史を相対化する目論見

があると同時に、時間が経つにつれて見えにくくなってきた側面を照射することにもつながる。たとえば、真鍋が注目している漫談では、徳川夢声が数多くの評伝や回想がなされているのとは対称的に、大辻一郎は注目されていない。漫談の歴史を開拓した二人であるが、夢声のラジオ朗読といった「名演技」の評価が固定していくなかで、大辻が忘却されてきた理由はどこにあるのか引き続き考察していきたい。

その他の成果

研究期間中に、森川司氏旧蔵の浪花節 SPレコードを国際日本文化研究センターに寄贈することができた。真鍋の前科研で進めていた寄贈にあたっての前提作業をふまえて、本科研で公的機関への寄贈を達成したことになる。ひとつの演芸ジャンルに特化したSPレコードコレクションとして特筆すべきものとなっており、今後の活用が期待される。

本共同研究のなかで派生的に得られたテーマとして「地域文化としてのメディア文化」が挙げられる。活動弁士の系譜に関する資料調査をおこなっているなかで、松永文庫（北九州市）の資料調査をおこなった。そこから派生して、同文庫の興行関係の資料調査を継続的におこなっているが、地域文化として大衆的なメディア文化史の記述を構想するという試みを今後も検討していく。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計13件)

岡田祥平、インターネット上に確認される略語 ツイッターと「質問サイト」を対象とした研究の可能性、日本語学、査読無、34-2、2015、4-16

上田学、映画以前の視覚文化の諸相 日清戦争期の京都における幻燈と見世物、立命館文学、査読無、635、2013、145-153

細田明宏、講談と浪花節の『壺坂靈験記』、帝京大学文学部紀要 日本文化学、査読無、44、2013、35-112

真鍋昌賢、「語り物」から 口頭芸 へ、日本民俗学、査読有、270、2012、128 - 145

〔学会発表〕(計11件)

真鍋昌賢、1930年代のメディアと口頭芸、昭和文学会第56回研究集会(招待講演)2015年5月9日、横浜国立大学

上田学、上演空間の変容 サイレント時代からトーキー時代にかけて、Kinema Club Conference XIV(招待講演)2014年11月22日、明治大学

細田明宏、人形浄瑠璃における数名の芸術学的意義について、美学会第64回全国大会、2013年10月14日、東京芸術大学

岡田祥平、現代日本語の音声研究のこれま

でと今、そしてこれから 私の立場、新潟県
ことばの会平成 24 年度研究集会、2012 年 11
月 23 日、新潟大学
〔図書〕(計 7 件)

安田常雄他編(分担執筆:真鍋昌賢)、有
志社、講座東アジアの知識人 2 近代国家の
形成、2013、364(分担部分:172-188)

Hugh de Ferranti and Alison Tokita(eds)
(分担執筆:真鍋昌賢)、ASHGATE、Music,
Modernity and Locality in Prewar Japan:
Osaka and Beyond、2013、307(分担部分:122
- 134)

丸橋良雄他編(分担執筆:細田明宏)、英
光社、比較文化への視点、2013、168(分担部
分:89-100)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

真鍋 昌賢 (MANABE, Masayoshi)
北九州市立大学・文学部・教授
研究者番号: 50346152

(2) 研究分担者

細田 明宏 (HOSODA, Akihiro)
帝京大学・文学部・准教授
研究者番号: 20412801

(3) 研究分担者

岡田 祥平 (OKADA, Syohei)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号: 20452401

(4) 研究分担者

上田 学 (UEDA, Manabu)
早稲田大学・文学学術院・日本学術振興会
特別研究員
研究者番号: 80546143